

死後

芥川龍之介

青空文庫

……僕は床へはいつも、何か本を読まないと、寝つかれない習慣を持つている。のみならずいくら本を読んでも、寝つかれないことさえ稀まれではない。こう言う僕の枕もとにはいつも読書用の電燈だのアダリン錠じょうびんの罐びんだのが並んでいる。その晩も僕はふだんのように本を二三冊蚊帳かやの中へ持ちこみ、枕もとの電燈を明るくした。

「何時なんじ？」

これはどうに一寝入りひとねいりした、隣の床にいる妻の声だつた。妻は赤児に腕うで枕まくらをさせ、ま横にこちらを眺めていた。

「三時だ。」

「もう三時。あたし、まだ一時頃かと思つていた。」僕は好い加減な返事をしたきり、何ともその言葉に取り合わなかつた。

「うるさい。うるさい、黙つて寝ろ。」

妻は僕の口真似くちまねをしながら、小声にくすくす笑つていた。が、しばらくたつたと思うと、赤子の頭に鼻を押しつけ、いつかもう静かに寝入つていた。

僕はそちらを向いたまま、説教因縁除睡鈔せつきよういんねんじよすいしょと言う本を読んでいた。これは和漢天竺てんじくの話を享保頃の坊さんの集めた八巻ものの隨筆である。しかし面白い話は勿論、珍らしい話も滅多めったない。僕は君臣、父母、夫婦と五倫部の話を読んでいるうちにそろそろ睡氣ねむけを感じ出した。それから枕もとの電燈を消し、じき

に眠りに落ちてしまつた。――

夢の中の僕は暑苦しい町をSと一しょに歩いていた。砂利を敷いた歩道の幅はやつと一間か九尺しかなかつた。それへまたどの家も同じようにカアキイ色の日除けを張り出していた。

「君が死ぬとは思わなかつた。」

Sは扇を使いながら、こう僕に話しかけた。一応は氣の毒に思つていても、その氣もちを露骨に表わすことは嫌つてゐるらしい話しぶりだつた。

「君は長生きをしそうだつたがね。」

「そうかしら?」

「僕等はみんなそう言つていたよ。ええと、僕よりも五つ下だね

、」とSは指を折つて見て、「三十四か？ 三十四ぐらいで死んだんじや、」——それきり急に黙つてしまつた。

僕は格別死んだことを残念に思つてはいなかつた。しかし何かSの手前へも羞はずかしいようには感じていた。

「仕事もやりかけていたんだろう？」

Sはもう一度遠慮勝ちに言つた。

「うん、長いものを少し書きかけていた。」

「細君は？」

「達者だ。子供もこの頃は病氣をしない。」

「そりやまあ何よりだね。僕なんぞもいつ死ぬかわからないが、

……」

僕はちよつとSの顔を眺めた。SはやはりS自身は死なずに僕の死んだことを喜んでいる、——それをはつきり感じたのだつた。するとSもその瞬間に僕の気もちを感じたと見え、厭な顔をして黙つてしまつた。

しばらく口を利かずに歩いた後、Sは扇に日を除けたまま、大
きい缶づめ屋の前に立ち止つた。
かん

「じゃ僕は失敬する。」

缶づめ屋の店には薄暗い中に白菊が幾鉢も置いてあつた。僕はその店をちらりと見た時、なぜか「ああ、Sの家は青木堂の支店だつた」と思つた。

「君は今お父さんと一しょにいるの?」

「ああ、この間から。」

「じゃまた。」

僕はSに別れてから、すぐにその次の横町を曲がった。^{まが}横町の角の飾り窓にはオルガンが一台据えてあつた。オルガンは内部の見えるように側面の板だけはずしてあり、そのまた内部には青竹の筒が何本も豎てて並んでいた。僕はこれを見た時にも、「なるほど、竹筒でも好いはずだ」と思った。それから——いつか僕の家の門の前に佇んでいた。

古いくぐり門や黒塀^{くろべい}は少しもふだんに変らなかつた。いや、

門の上の葉桜の枝さえきのう見た時の通りだつた。が、新らしい標札^{ひょうさつ}には「櫛部寓^{くしべぐう}」と書いてあつた。僕はこの標札を眺め

た時、ほんとうに僕の死んだことを感じた。けれども門をはいることは勿論、玄関から奥へはいることも全然不徳義とは感じなかつた。

妻は茶の間の縁側えんがわに坐り、竹の皮の鎧よろいこしらを拵えていた。妻のいまわりはそのために乾皮ひぞくつた竹の皮だらけだつた。しかし膝の上にのせた鎧はまだ草摺くさずりが一枚と胴としか出来上つていなかつた。「子供は?」と僕は坐るなり尋ねた。

「きのう伯母おばさんやおばあさんとみんな鶴沼くげぬまへやりました。」

「おじいさんは?」

「おじいさんは銀行へいらしつたんでしよう。」

「じゃ誰もいないのかい?」

「ええ、あたしと静やだけ。」

妻は下を向いたまま、竹の皮に針を透して^{とお}していた。しかし僕はその声にたちまち妻の謔^{うそ}を感じ、少し声を荒らげて言つた。

「だつて櫛部寓つて 標^{ひょう}札^{さつ}が出でいるじやないか？」

妻は驚いたように僕の顔を見上げた。その目はいつも叱^{しか}られる時にする、途方^{とほう}に暮れた表情をしていた。

「出でいるだろう？」

「ええ。」

「じゃその人はいるんだね？」

「ええ。」

妻はすっかり悄氣^{しょげ}てしまい、竹の皮の鎧^{よろい}ばかりいじつていた。

「そりやいてもかまわないさ。俺はもう死んでいるんだし、——
僕は半ば僕自身を説得するように言いつづけた。

「お前だつてまだ若いんだしするから、そんなことはとやかく言
いはしない。ただその人さえちゃんとしていれば、……」

妻はもう一度僕の顔を見上げた。僕はその顔を眺めた時、とり
返しのつかぬことの出来たのを感じた。同時にまた僕自身の顔色
も見る見る血の氣を失つたのを感じた。

「ちゃんとした人じやないんだね？」

「あたしは悪い人とは思ひませんけれど、……」

しかし妻自身も櫛部某に尊敬を持つていなることははつきり僕
にわかつていた。ではなぜそう言うものと結婚したか？　それは

まだ許せるとしても、妻は櫛部某の卑しいところに反つて氣安さを見出している、——僕はそこに肚はらの底から不快に思わずにはいられぬものを感じた。

「子供に父と言わせられる人か？」

「そんなことを言つたつて、……」

「駄目だめだ、いくら弁べん解かいしても。」

妻は僕の怒鳴るよりも前にもう袂たもとに顔を隠し、ぶるぶる肩ふるを震わせていた。

「何と言う莫迦ばかだ！ それじや死んだつて死に切れるものか。」

僕はじつとしてはいられない気になり、あとも見ずに書斎へはいつて行つた。すると書斎の鷺居かもいの上に鳶とび 口ぐちが 一いつ 梓ちよ かかつ

ていた。鳶口は柄を黒と朱との漆に巻き立ててあるものだつた。
誰かこれを持つていたことがある、——僕はそんなことを思い出
しながら、いつか書斎でも何でもない、枡殻垣に沿つた道を歩
いていた。

道はもう暮れかかつていた。のみならず道に敷いた石炭殻も霧き
りさめ雨か露かに濡れ透つていた。僕はまだ余憤を感じたまま、出来
るだけ足早に歩いて行つた。が、いくら歩いて行つても、枡殻
垣はやはり僕の行手に長ながとつづいているばかりだつた。

僕はおのずから目を覚ました。妻や赤子は不相変静かに寝入
つてゐるらしかつた。けれども夜はもう白みかけたと見え、妙に
しんみりした蝉の声がどこか遠い木に澄み渡つていた。僕はその

声を聞きながら、あした（実はきょう）頭の疲れるのを憚れ、もう一度早く眠ろうとした。が、容易に眠られないばかりか、はつきり今の夢を思い出した。夢の中の妻は気の毒にもうまらない役まわりを勤めている。Sは實際でもああかも知れない。僕も、——僕は妻に対しては恐しい利己主義者りこしゅぎになつてゐる。殊に僕自身を夢の中の僕と同一人格と考えれば、一層恐しい利己主義者になつてゐる。しかも僕自身は夢の中の僕と必しも同じでないことはない。僕は一つには睡眠を得るために、また一つには病的に良心の昂進こうしんするのを避けるために○・五瓦グラムのアダリン錠を嚥み、昏々とした眠りに沈んでしまつた。……

（大正十四年九月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年2月1日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

死後

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>